

埼玉県下に於ける初誕生儀礼

近 藤 直 也

一、はじめに

青森県下の初誕生儀礼研究に端を発し、北から順々に南下しつつある一連の論稿も、やっと埼玉に入る事ができる。群馬県下では、膨大な資料に出くわしたため、その分析と考察にかなり手間取り、多くの時間と労力を費してしまった。しかし、膨大な資料は反面緻密で詳細な資料を我々に提供することにもなり、今まで見えて来なかった様々な新しい局面に遭遇する事もできた。埼玉県下の資料も管見の及ぶ範囲だけでも三二例に達し、様々なメッセ―ジを我々に与え、多くの問題を提起してくれるに違いない。まず最初に、一つ一つの事例をじっくり吟味しておこう。

二、埼玉県に於ける初誕生儀礼の事例

1、浦和市・初誕生には、赤飯を炊いて神様に供え、お祝いをする。初誕生までに歩く子供には、ブツエモチ（栄和）といって、一升餅や餅米一升を背中に負わせて歩かせる。一年にならないで歩くのはよくないという、

お誕生には、初子は親戚を呼び、赤飯などを作ってお祝いをする。誕生前に歩くと、一升餅を背負わせて歩かせる（南元宿）。誕生日が来ないうちに歩く子には、ブツイモチといって誕生日は一升餅をついてしよわせ、それでもぶつつかないともっと増やしてしよわせ、ぶつつかせる。現在では餅でなく米のまましよわせる（三室の山崎）。

2、浦和市大久保^{おおくぼ}領家・誕生祝いは里方・親戚・近隣に鳥の子餅または赤飯を配り、これらの者を招じて祝宴を張る。誕生前に歩いた子には丸餅を背負わせ、歩けなくなるまで餅の数を増やして背負わせた。これをブツイモチと呼んでいる。

3、川越市・アルキワイ（歩きの祝い）旧芳野村・日高町高萩・川島村中山では最初の誕生日をアルキワイといい、チカラモチをついて子供に背負わせ、その餅を切つて里方へとどける。滑川村宮前では子供が歩きだすと、餅をついて背負わせ赤飯を炊いて親類などに配る。所沢市富岡では初めての誕生日をムカエビ（向かえ日）といっている。

・ブツセイモチ 入間市豊岡・足立町志木・川越市では初の誕生日に子供に背負わせる一升餅をブツセイモチといい、旧所沢町ではブツワリモチという。旧所沢町の某家では子供を裸にしてたらいの中に立たせ、一升餅を負わせる。このとき早く足がつくと悪いといって子供が立つとわざとこぼらせ、所沢市富岡では一人でこぼれないと不幸だという。歩けない子供には旧川越町では赤飯を炊く。旧川越町・鳩山村今宿・川島村八ッ保ではブツセイモチをヒツチョイモチといい、朝霞市では誕生前に歩きはじめた子に限って背負わせる。旧古谷村ではタチモチという。

・ぞつり 旧田面沢村ではじめての誕生日を赤飯とおかしら付きの魚で祝う。はじめてぞつりをはくときは、その子供は鎮守様にそろえるのだといって、はく前にはだしになって自分のはきものをちよつとそろえる。これはいままで鎮守さまのお世話になったお礼のためだという。

4、川越市杉下^{すぎした}・誕生祝いには豆や梅干しを八〜九個、親戚などから持ってきた。また、誕生日前に歩きはじめた

場合は、一升餅を背負わせた。

- 5、越谷市・ムカリツキ（誕生日）前に歩けるようになった子にはブツツイモチ（ブツショワセ餅の意）をさせる。このような子には悪い運勢があるといい運命占いをしてもらう（平方）。歩ける時はブツツイモチという直径8cm位の丸い餅をひもに通し、首につるし歩かせるといふ。しっかりした子供はその餅を――しよったという。お祝いにお餅をつき、親元へもっていく（下間久里）。（略）誕生日前に歩けた子にはブツツイモチをさせる。宮まいりは男も女も二日目にする、香取神社に参る（向畑）。（略）誕生日の時、歩き出した子に一升餅をしよわせた。それをブツツイモチと呼び、その餅を持って里へ泊りに行った。昔の子はおムツでギョウウとしゃべっていたから一年目で歩かない子が多かった。だから兄弟の中で誰がブツツイモチをしよったかが話題になる（大松）。一年目に歩く時はブツツイモチと言って風呂敷に餅をくるんでしよわせた。餅のかわりに米をしよわせることもあった。その日その餅を嫁の親元へもたせた。昔は一年目にはなかなか歩けず、一年三カ月で歩く子が多かった（増森）。一歳の誕生日前に歩けるようになると、一升餅をかつがせる。これをブツツイ餅という（登戸）。（略）ムカリツキ（誕生日）前に歩き始めると一升餅をかつがせた（東方）。（略）一年目。おちゃわんをそろえ、赤飯をたく、この時歩けるようになってくる子には「力もち」といい、しよえるだけ背おわせ、嫁の実家へもっていく（麦塚）。

- 6、戸田市・はじめての誕生日には、赤のご飯をたいて、家の内だけで祝うものであった。この日までに歩くと、その子が大きくなってから、遠くに出てしまふとか、跡取りになれないとかいって、よくないように伝えられた。そこで、この日の祝いには、ブツツイモチなどといって、一升餅をついて風呂敷などに包み、子供にせおわせて、ひっくり返るまで歩かせることが行われた。いつまでも歩いていると、わざとひっくり返したものである。今では、わざわざ餅をつかないでも、米一升を袋に入れて、風呂敷に包んでせおわせているという。

- 7、戸田市美女木下笹目・戦争前までは、年齢は正月にとつたのでくに誕生日を祝うことはなかった。しかし、誕生日に歩いた子には、誕生日に米一升で搗いた餅を背負わせ歩かせた。上手に歩けると、力持ちになるとい

い喜んだ。内々です。

8、和光市・往時は、初誕生に対する意識は二通りあった。一つは内輪で宴を持つ程度で、これを行わないこともあった。他は男女児の初子については親を招き、赤飯を蒸かして盛大に行つた家もあったのである。初誕生に行つた民俗に、一升餅を搗いて背負わせるといふことがあつた。餅は丸餅で、風呂敷に包んで背負わせたもので、背負わせても転ばないようなことがあると、更に量を増やしたり、後ろから押ししたりして、必ず転ばせるものとしていた。市域ではタンジョウモチ（誕生餅）と称していたが、県内ではブツツイモチ、ブツツエモチ、ブツチエーモチ、ブッセモチ、ブツカケモチ、ブツツケモチ、ブツツアリモチ、ヒツチヨイモチ、タチモチ、チカラモチなど、様々な呼び方が見られた。上福岡市では誕生日前に歩けるようになった子供をオニツコ（鬼っ子）と呼び、大井町ではこの時転ばせないと女の子は遠くへ嫁に行けないと言つていた。市域では、これは初子だけでなく、誕生日前に歩けるようになったすべての子供に行つたとも言つてゐる。往時は一歳前に歩き出す子は今日ほどこいなくつたが、順調にあまり早く歩き出すことを良くないとして嫌つたためと思われる。

9、和光市上新倉・今日では、内輪で宴を持つ。とはいへ、これを行わない家も多い。往時は一升餅を搗いて背負わせていた。丸餅で、稀に餅を背負わせても転ばないようなことがあると、更に二升餅を背負わせ、必ず転ばせるものとしていた。Aさんは、同じくこの日生児を連れて親元に行き、一泊して来た。

10、和光市下新倉・内輪で宴を持つ。これを行わない家もある。かつては一升餅を背負わせていた。丸餅で、稀に背負わせても転ばないようなことがあると、更に二升餅を背負わせたり後から押ししたりして、必ず転ばせるものとしていた。早く歩き過ぎるのを嫌つたためである。しかしながら、初誕生の日に歩けない子も少なくない。このため、この日に行なわず、実際に歩行が出来るようになってから行くこともあつた。同じくこの日、生児を連れ赤飯を持つて親元に行き一泊して来たこともある。

11、秩父市浦山・生後一か年目を祝つて、子供に誕生餅を背負わせる。立ち立ち誕生ともいい、誕生日に立つことまたは歩くことができれば、成長が良好であることを示す。この日、重箱に餅または赤飯をいれ、本家・分家や

12、付き合いをしている家にくばる。それをもらった家では、まめに育つようにと、大豆または小豆をいれて返す。
秩父市品沢・誕生祝いには、おもに祝い餅が配られる。餅はあんこ入りで、その返礼として、子供がまめに育つようにという意味で、大豆または小豆が贈られる。この日、子供に誕生餅を背負わせる。一升餅を背負うことができれば、子供が順調に成育していることを示すものとされ、必ずこの行事を行なった。

13、狭山市・誕生を迎える前に子供が歩き始めるようになるのはあまりよくないとい、故意に突いて転ばしたりする風習がある。また、「一升餅」とか「ぶつつえ餅」という餅を作り、子供に背負わせたりもする。生まれて初めての誕生日を迎えたばかりの子供に、一升もの餅を背負わせればなかなか歩けるものではない。こうしたことをするのは歩けということではなく、はいはいをして手足を十分に鍛えるという、われわれの祖先が長い経験から生み出した願望に基づいているものではないかと考えられる。また、この日には赤飯を炊き母親の里や親戚・仲人などへ配った。

14、草加市柿木町・誕生日までに歩いた子には餅を背負わせ、背負った数だけの餅を近所に配る。その返礼には豆を入れて返す。

15、鴻巣市原馬室・誕生祝いには、子供に餅を背負わせる。この日、塩あんの入った餅を配るが、配られた家では、男の子の場合は大豆を、女の子の場合は小豆を入れてお返しとする。

16、東松山市・生れてはじめての誕生日には誕生祝いを行う。乳児の誕生日がそれぞれ違ったため家族単位で祝う。もし誕生日までに歩ければ紅白の餅をつき、歩けなければ赤飯を作り、ユミハマをもらった家々に配る。この餅を誕生餅と呼ぶ。また歩ける乳児には一升餅を背負わせる。ほとんどが歩けないが親たちは二・三歩歩いただけでも「歩いた歩いた」と喜び、良く歩けた場合は二升餅を背負わせる。早く歩けるようになると家に寄り付かなくなるといふことで二升餅を背負せよとさせる家もあるという。誕生着は母親の里から一つ身か三つ身の着物が送られて来る。この着物を着せて母親の実家に行き一泊して来る。

17、行田市忍・誕生祝いには赤飯をたいて祝う。なお誕生前に歩いたときには、一升餅を背負わせて歩かせた。

18、岩槻市・初誕生までに立ち歩く子には、この日ブツイモチをショワセルといって、家でついた四丁五寸（二丁一五センチ）の丸い白餅を風呂敷に包んで背負わせる。最近では餅米一升を背負わせるようになった家が多い。初誕生には赤飯を炊いて祝う。現在では初誕生や初正月といっても特別の祝いはしないところが増えた。市宿では、普通は初誕生から三日して歩くのに誕生前に歩きはじめた子は良くないので、「餅をしょわせる」という。浮谷や馬込では、「どの位歩けるか、どの位しようか、力があるかな」と力試しをするのだと説き誕生前に歩く子を悪いとは言わない。飯塚では初誕生より早く歩くとガ二股になるといい、餅を背負った子供が尻餅をつくとき良いといわれる。この時の一升餅はトリノコと呼ぶ卵形の紅白一組を、餅屋で箱をたのみ水引きをかけ、嫁の実家と仲人がもつて来る。小溝では一〇か月経って歩けるようになると餅を背負わせる。黒谷では赤子が背負った数だけの餅を里へ持つて行く。

19、北葛飾郡庄和田倉常・誕生祝いには誕生餅といって、里方にアンピン餅をくばる。このとき里方からは着物を贈る。かつては誕生前から歩けるようになった子には、この日に一升餅をしょわせて歩かせ、わざとつついて転ばせた。

20、北葛飾郡杉戸町下高野・誕生日には赤飯や餅をつくり、神棚に供えたり、近所に配つたりする。また、子供が誕生日までに歩いたときは、ブツイ餅といって餅を背負わせた。

21、入間郡日高町高麗本郷・誕生祝いには、赤飯をつくり家族で祝い、親元や近所の世話になった人に配る。この場合、「マメに育つように」と、小豆か大豆を紙に包んで返す。一歳の誕生日前に歩くことができた子供がある家では、一升のもち米でつきあげた一升餅をつくり、その餅を子供に背負わせて宮参りをし、里方にあいさつに行く²²⁾。

22、比企郡小川町小貝戸・誕生祝いには餅をくばる程度である。また、一升餅を背負わせるといって、ふるしきに餅を包んで肩から背負わせた。²³⁾

23、秩父郡大滝村・初めての誕生日には、実家の親たちを呼んでお祝いをする。親戚からは履物（主に長靴）が贈

られる。誕生餅といって、小豆餠（昔は砂糖などなく塩餠であつた）の入つた餅を作り、組の氏神さまに供える。そして五つぐらい紙に包んだり、お重に入れて風呂敷に包み、子どもにしよわせる。家族の者が手を打つて囃し、歩かせる。このとき「しよってヤイヤヤム」といって、つきとばすものだといふ。これは子どもに旅立ちの真似をさせるのである。実家や親戚に誕生餅を配る。まめで達者に暮らせるように豆をお重にいっぱいに入れてお返しとする。豆は味噌豆（大豆）が多い。ほかの物を返すときも、必ず豆をオヒネリにしてつける²⁴⁾。

24、秩父郡大滝村滝之沢・誕生祝いには赤飯をつくり、重箱に入れて隣近所・親戚などに配る。また、餅をくばる。そのお返しには大豆または小豆をいれるが、それらがなければ、マツチの小箱をいれて返す。子供には餅を背負わせるが、一升分の餅が背負えるときとされている²⁵⁾。

25、秩父郡吉田町下吉田・誕生祝いには赤飯を炊いてくばる。なお、その返礼としては豆をいれて返す。この日、子供に餅を背負わせる²⁶⁾。

26、大里郡花園村黒田・誕生祝いには、餅を親戚・組内へくばる。受けた家では豆を入れてお返しをする。里方からは三つ身の着物が贈られる。子供には餅を背負わせる²⁷⁾。

27、児玉郡上里村・生まれて一年目の誕生祝いには、本家・分家・近所・知人など、いつも世話になる人のところには、大きな餅や赤飯を重箱に入れてくばる。餅のなかのあんは、昭和の初めごろまでは塩だけで味付けをした。子供の祝いで餅や赤飯をくばると、重箱の中に大豆や小豆を入れて返す。これは子供がために育つようにという願いからである。餅をもらつた家では、子供のげたを買つて返した。なお、子供が力持ちになるようにといつて、餅を重箱に入れてふるしきで包んで背負わせた。この日も酒とさかなで親戚の人を招いて祝つた²⁸⁾。

28、北埼玉郡北川辺村飯積・誕生祝いにはアンピン餅をくばる。くばられた家では、まめな子供に育つという縁起をかついで豆をいれて返す。この日までに歩き出した子供に、アンピン餅を背負わせることもある²⁹⁾。

29、北埼玉郡騎西町正能・誕生祝いには、塩あん入りのアンピン餅を奇数個にしてくばる。受けた家では、まめに

達者であるようにという意味で、豆をいれて返す。またこの日子供に餅を背負わせる³⁰。

30、南埼玉郡久喜町吉羽・誕生祝いには、出産の祝いをもらった家へ餅を持って行き、返りには、マメになるようにという意味で、大豆か小豆を入れて返す。誕生までに子供が歩いた家では大きな重箱にいっぱい餅をいれて子供に背負わせる³¹。

31、埼玉県下・最近でこそ子どもの発育がよく、誕生日前に歩く子どもが多いが、かつてはそうした子どもは少なかった。そこでこの日に、搗いた餅を子どもに背負わせることを県内で広くやっている。この餅の呼び名は単にオタンジョウ餅というばかりでなく、土地によって異なる。たとえば浦和市ではブツツイ餅というが、ブツツイ餅（狭山市）・ツテ餅（都磯川村）・ブツツケ餅（杉戸町）などの呼び名もある。寄居町や秩父地方では一般にタンジョウ餅といって、背負ったとえ一歩でも歩くと家族が大喜びをしたが、他のところでは必ずしも喜ばない。狭山市や庄和町では一年で歩く子どもは珍しく、そうした子どもがいると一升餅を搗いて、背負わせた。ほとんどの子どもがフラフラして転ぶが、それでも転ばない子どもは、わざと突きとばして転ばせた。そうしないとよくないといった。この日は、嫁にとつてもうれしい日で、嫁が子どもと一緒に里帰りをすることが多い。皆野町や吉田町では、子どもが背負った餅を持って里帰りをした³²。

三、一歳未満の歩行の僅少さ

5の越谷市大松では、「昔の子はおムツでギユウと始めていたから一年目で歩かない子が多かった。だから兄弟の中で誰がブツツイモチをしょったかが話題になる」という。一歳未満の歩行の善悪は別として、多くの子供は一歳過ぎてからでしか歩かなかった事、その理由として襦袢でのかたいしめつけ、さらに一歳未満の歩行が余りにも珍しかったため親族などが寄り集まった時などにその事が話題となるなど、生活実感として一歳未満の歩行の希少さがこの伝承によく表わされている。さらに5の増森では、「昔は一年目にはなかなか歩けず、一年三カ月で歩く

子が多かった」という。経験的に弾き出された数値として、一年三ヶ月が出てきた。恐らく統計を取ったわけではなからうが、普段の日常会話の中で子供の初歩きが話題に挙がったとき、人々は自らの経験や伝聞を出し合った結果このような数値に落ちついたのである。この資料は昭和四五年に刊行され、この段階での「昔」であるから昭和初期頃の状態を語ったものであろう。

また、昭和五八年に刊行された8の『和光市史』では、「往時は一歳前に歩き出す子は今日ほどいなかった」と述べており、ここでも時代の変遷により初歩行の時期が早まった事を実感として述べている。ここで言う「往時」とはいつ頃を指すか不明であるが、恐らく戦前か戦後すぐの頃を指すのではなからうか。とにかく、昭和五〇年代の後半頃になると、一歳未満で歩行し始める子供はそれほど珍しくはなくなってきたのである。この変化が、後に詳述する初誕生儀礼の伝承に大きく影を落とすことになるため、頭の隅に留めておきたい。

10の和光市下新倉では、「初誕生の日に歩けない子も少なくない」と述べ、この為に初誕生の餅背負いを、実際に立ち歩きができるようになるまで延期するほどである。建て前が、現実には引きずられながら変化する過程は後に詳述したい。ここでも、満一歳の歩行は珍しいものとされていたのである。

13の狭山市では、「生まれて初めての誕生日を迎えたばかりの子供に、一升もの餅を背負わせればなかなか歩けるものではない」という。5・8・10で触れた如く、満一歳で歩く事そのものが極めて珍しい現象なのであり、そのやっとの思いで立ち歩く稀有な子供に一升餅を背負わせるのであるから、歩ける確率は殆どゼロに近い。13の言及は、建て前と現実の齟齬を卒直に表明したものであり、この中にこそ初誕生儀礼の本質が隠されているような気がする。言及はかなり説得力を持つ。餅を背負わす事によって、倒れる事が眼に見えていても、敢えて行なうのである。この状況から判断すれば、倒すために餅を背負わせたと考えた方が、より正鵠を射ているのではなからうか。

16の東松山市では、満一歳で「歩ける乳児には一升餅を背負わせる。ほとんど歩けないが、親たちは二・三歩歩いただけでも『歩いた歩いた』と喜び、良く歩けた場合は二升餅を背負わせ」ていた。ここでも、殆ど歩ける可能

性はゼロに等しいにもかかわらず、一升餅を背負わせるのであった。ヨロヨロしながらでも二丁三歩歩けば、「歩いた」ことになり、「喜ぶ」のであった。ところが、喜ぶだけに留まらず、その子供にはさらに二倍の二升餅を背負わすのである。ここまでくれば、歩く事を期待した餅背負いという判断が間違いである事に気がつく。確かに私たちは喜んでいるかもしれないが、この儀礼の構造を見ていると親の喜びは単なる表面的なものにしか評価できない。ほとんど歩けない事を承知の上で満一歳の子供に一升餅を背負わせ、それでもめげずに二丁三歩でも歩くような稀に見る頑健な子供に対しては二升餅を背負わすのである。この儀礼の構造上から判断すれば、その意図は一歳未満の子供の歩行は是非でも阻止せねばならないという一語に尽きる。何の負荷もなく、ただ立つて歩くだけでもかつての満一歳の子供にとれば至難な技であったのに、そこに一升餅を背負わせ、それでもまだ歩けば二升にするという儀礼上の意図は、決して親の「喜び」だけで行なわれるものではなかったと考えるべきであろう。その本質は、むしろ転倒にあつたと断言できる。

18の岩槻市市宿では、「普通は初誕生から三日して歩くのに、誕生前に歩きはじめた子は良くない」ので「餅をしよわせる」という餅背負いの善悪については後に詳述するが、ここでは一歳未満の歩行は悪であり、そのペナルティとして餅背負いが存在する。16の事例とは正反対であり、伝承そのものに大きな混乱がみられる。恐らく、この儀礼の主流は一歳未満で歩く子供に対する転倒であり、転倒せずに歩く子供に対する元気が16では逆にプラスに評価されたのであろう。

さて18では、普通の初歩きの開始期が「初誕生から三日」として設定されている。満一歳と三日とは、極めて半端な期間である。5の、一年三ヶ月が普通の子供の歩き始めの期間という事例を考え合わせれば、この「三日」は「三ヶ月」の誤りではなからうか。もし敢えて「三日」というのであれば、この期間についての必然性をもっと明確にされねばなるまい。また同市小溝では、「一〇か月経って歩けるようになると餅を背負わせる」という。ここでは、餅背負いがペナルティとして行なわれていたか否かは不明である。しかし、一歳未満の歩行が極めて珍しく異常視されていたという全体の趨勢から判断すれば、満一年よりも二ヶ月も短い一〇ヶ月目の歩行は、決して褒め

たものとして評価されていなかったであろう事は容易に推測できる。

31は県下全域の概況を述べたものであるが、「最近でこそ子どもものの発育がよく、誕生日前に歩く子どもが多いが、かつてはそうした子どもは少なかった。そこでこの日に、搗いた餅を子どもに背負わせることを県内で広くやっている」という。この資料は昭和五三年に刊行されたものであり、「最近」とは昭和五〇年代前後を指すと考えられる。ここでいう「かつて」は、昭和初期頃を指すのであろうか。とにかく、ここでもかつては子供の発育があまり良くなく、満一歳で歩ける子供は少数であったと言つ。この直後に、餅を子供に背負わせる事の言及があるのだが、両者の間に「そこで」という接続詞が介在する。これは一体どういう意味なのであろうか。文脈の上から推測すれば、満一歳で歩ける子供は珍らしく異常であつた。「そこで」縁起直しの意味で餅を背負わせ、これによつて転倒させる事によつて歩かなかつた事にしようとしたと解釈できる。この解釈を裏付けるかのように、餅はブツツイ餅とかブツツエー餅、ブツツケ餅など転倒を暗示するような名称がつけられているのであつた。

さらに31では狭山市や庄和町の事例を紹介し、「一年で歩く子どもは珍しく、そうした子どもがいると一升餅を搗いて背負わせた。ほとんどの子どもがフラフラして転ぶが、それでも転ばない子どもは、わざと突きとばして転ばせた。そうしないとよくないといった」と述べている。この構造は、先述した16の東松山市の事例と殆ど同一である。即ち、満一歳で歩く子供が少なかった事、転倒を意図して餅を背負わせた事、それでも倒れずに歩けば二升餅を背負わすか、わざと突き倒すかで、とにかく転倒を期待するという構造である。この伝承から、一歳未満で歩く事が悪であるということ。歩かなかつた事するために一升餅を背負わすこと、それでも転ばずに歩く子供はもつと不吉であるというメッセージを我々は受け取ることになる。

以上、全三二例中七例（延べ九例）で一歳未満の歩行がかつては少なかった事が明らかとなつた。この少なさは、単に数が少ないだけでなく、一歳未満の歩行そのものがかつては異常なものであり、異端視され迫害に近い状況が展開していた事をも意味する。

一歳未満の歩行が少ないという事例は、七例で全体の二三%ほぼ四分の一近くを占めるが、この数が多いか少な

いか、俄には判断できない。しかし、31を始め5や8で言及する如く、今でこそ珍しくなくなったが、昔は殆どが一歳未満では歩いていなかったたのであり、一年三ヶ月程で歩き始めるのが普通であつた。恐らく、もつと古くは一年三ヶ月の歩き始めでもまだ早い方であろう。このような状況から判断すれば、かつては殆どの地区で一歳未満の歩行は少ないとしていたであらう。というよりもむしろ伝統的な産育環境では、一歳未満の歩行など皆無でなければならなかったのではなからうか。即ち、このような状況下で一歳未満の歩行などが存在すれば、異端として迫害または矯正の対象となつていた。この具体的な矯正現象が、今日に初誕生儀礼として伝承されている餅背負いであつたと考えられる。

かつては一歳未満で歩く子供が少なかったという言及は、一歳未満で歩く事は絶対に認められないという強烈な否定の裏返しでもあつた。この点を最初に正確に押さえておかねば、初誕生儀礼の深層部分に隠された本当の姿は見えてこないのである。

四、一歳未満で歩いた場合の対処の仕方

初誕生儀礼の伝承を調べて行く中で、最初に気づく事は、一歳未満で歩けばどうするかという言及である。全三一例中二二例（延べ三九例）で見られ、全体の六八%ほぼ七割を占める。延べ数にすれば三九例もあり、単純計算しても一例につき二件近くの言及があつた事になり、特に5の越谷市では一例で九件もあつた。この事は、裏を返せば一歳未満の歩行は認められないというタブーの侵犯とも連動し、初誕生儀礼では一歳未満の歩行に最も神経を尖らせていた事を示すものでもある。換言すれば、初誕生儀礼はこの一歳未満の歩行という禁忌の侵犯に対し、どのように対処してきたか、その具体的対処方法のあり方でもあつた。個別的に、一つ一つその具体的内容を吟味する事によって、初誕生儀礼の趣旨を明確にしておきたい。

1では、「初誕生までに歩く子供には」、「フツツエモチといって、一升餅や餅米一升を脊中に負わせて歩かせ」

る。また、「誕生前に歩く」と「一升餅を背負わせて歩かせ」る。さらに、「誕生が来ないうちに歩く子」には、「ブツイモチ」といって、誕生日は一升餅をついてしよわせ、それでもぶつつかないと、もつと増やしてしよわせ、ぶつつかせ」る。ブツエ餅とブツツイ餅、両者の違いはエとイだけであり、「据え」という語幹は共通する。ブツは、接頭辞ブチ（打ち）の促音化であり、動詞に冠して強意・強勢の意味を持つ。一升餅を背負わす事により、二足歩行する子供を倒し、腰または尻を床に着かせよつとしたと考えられる。餅の名称から判断すれば、ツエは「据え」であり、ツイはその訛音であり、「着く」とは考えられない。「ぶつつかないと、もつと増やしてしよわせぶつつかせる」という表現があつて「着く」の意で解釈されているが、もしそうならブツキモチになるはずであるが、ブツエまたはブツツイ餅である。意味の上で、微妙なニュアンスのずれが生じている。本来は、一升餅を背負わせる事により、尻または腰を据えさせる、換言すれば歩かせないまたは立たせない事に意味があつた。一升餅は、儀礼の簡略化によって、餅以前の生米が背負われる現象も見られる。とにかく、歩かせない点に意味があり、一升餅を背負わせてもまだ倒れずに歩く場合には、さらにその量を増やして重くし、これによって一歳未満の二足歩行を何とか阻止しようとしていた。

2では、「誕生前に歩いた子」には、「丸餅を背負わせ、歩けなくなるまで餅の数を増やして背負わせた。これをブツイモチと呼ぶ」ここでも、一歳未満で歩く子に限定して、ブツイ餅を背負わせ、歩けなくなるまで餅の量を増やす。つまり、この背負い餅は名実共に、子供の転倒を意図した餅であつた。しかも、一歳未満で歩いた子だけに限定され、一歳過ぎて歩いた子供には餅背負いは無かつた。「誕生前に歩いた子には」という限定条件は、この事を如実に示す。歩けないのであるから、倒す必要も無いのは当然であろう。これ程までに、一歳未満の歩行に関しては大きな抵抗感があつたのである。

3は『川越市史民俗編』の資料であるが、比企郡滑川村の事例として、誕生前に「子供が歩き出すと、餅をついて背負わせ」る事、また旧所沢町某家で「子供を裸にしてたらいの中に立たせ、一升餅を負わせる。このとき早く足がつくと悪いといって子供が立つとわざとこぼせば」ていた事例を紹介している。さらに、朝霞市での「誕生前

に歩きはじめた子に限って（ブッセイモチを）背負わせる」事例にも言及があった。滑川村の場合、餅を背負うのは誕生日前に歩き始めた子供に限定されており、文脈から判断すれば、一歳未満で歩かなかった子供には餅を背負わせる必要はなかったであろう。旧所沢町の場合、満一歳で歩いても歩かなくても、無条件で一升餅を背負わせていたようであるが、この時一升餅を背負つても倒れずに立つような子供は「悪い」と称し、「わざとこぼせ」るのであった。ここではかつての餅背負いは一歳未満で歩いた子のみに限定されていたのではなからうか。まだ立てない子供に、餅を背負わせるという行為自体が不自然である。転倒を意図した負荷餅であれば、歩く子供のみを対象としていたと考えて間違いないまい。それでもまだ倒れない場合には、「わざとこぼせ」ていたのである。この儀礼で、転倒がいかに重要な役割を果たしていたか、また一歳未満の歩行がいかに恐れられていたかが理解できよう。

4の川越市杉下では、「誕生日前に歩きはじめた場合は、一升餅を背負わせた」という。この場合、転倒を目的とした一升餅背負いは誕生日前に歩きはじめた子供の場合のみに限定され、満一歳過ぎて歩く子供に餅を背負わせる儀礼は、かつて存在し得なかったと考えられる。

5は越谷市の事例であるが、ここでは九例も見られる。平方では、「ムカリツキ（誕生日）前に歩けるようになった子にはブツツイモチ（ブツショワセ餅の意）をさせる。このような子には悪い運勢があるといい運命占いをしてもらう」と言う。この資料から、一歳未満の歩行がいかに恐れられていたかがよく理解できよう。「悪い運勢」の背後には、縁起直しとしての「運勢占い」があると同時に、ブツツイ餅そのものも縁起直しとして行なわれていたと言える。一歳未満の歩行は不吉なものであり、歩かなかった事にするために転倒を意図したブツツイ餅背負いがあったのである。ここでは、ブツツイモチを「ブツショワセ餅の意」と注釈までつけているが、前述の1では「ブツツイモチ」とあり、誕生日は一升餅をついてしよわせ、それでもぶつつかないと増やしてしよわせ、ぶつつかせる」とあり、ブツツイは明らかに転倒を意味した言葉である事がわかる。少なくとも、ブツショワセではない事は確実である。背負わせにこだわるのであれば、3のブッセイモチの方がより近いのではなからうか。このブツ

セイ餅は、後述するが他の事例には全く見られず、恐らくツガセに転訛したものと考えられる。

同じく川越市の下間久里では、初誕生日に既に「歩ける時はブツセイモチという直径8cm位の丸い餅をひもに通し、首につるし歩かせるといふ。しっかりと歩いた子供はその餅を――しよった」といふ直径8cmの餅を何個通すものであったか不明であるが、とにかく満一歳の時点でこの儀礼が存在していた。「歩ける時は」という限定条件に注目すればまだ歩けない子供は餅を首に吊るして歩く義務は無かったようである。ブツセイ餅という名称は、その餅の本質をよく表明しており、元来一歳未満で歩く事が決して褒めたものではなかった事をよく示している。縁起直しのため、ブツセイ餅を首に吊るし、その重みで転倒する事によって、形式的に一歳未満で歩かなかった事にしたという願望の表明であった。褒めるべきは、初誕生までに歩かなかった子供の方である。ブツセイ餅を一個も首に吊り下げた子が、「しっかりと歩いた子供」として一応評価されているが、この評価は飽くまで今日の身体能力の規準に照らした上でのものである。かつての伝統的社会に於ける評価では、ブツセイ餅の名が示す如く、これは決して褒めたものではなく、平方で言う如く「悪い運勢」を引きずるものであった点を忘れてはなるまい。

向畑でも、「誕生前に歩けた子にはブツセイモチをさせる」と述べ、誕生前に歩けた子だけに限定し、それ以後に歩いた子供にはブツセイ餅を背負わせる必然性はなかった。また、餅の名称から、転倒を意図していた事を読み取る事ができ、これだけ短い伝承資料から一歳未満の歩行のタブーを見出し得る。

大松では、「誕生祝いの時、歩き出した子に一升餅をしよせた。それをブツセイモチと呼び、その餅を持って里へ泊りに行った」といふ。満一歳の誕生日、その当日に初めて歩いたとも解釈できるが、ここはそれ以前に既に歩いていた子と見る方が自然であろう。ブツセイ餅と言つ一升餅を背負わせる程であるから、これを背負えるような子供は、よほど前から歩けるような健脚な子でなければなるまい。ここではこの後に、「昔の子はおムツでギョウとしめていたから一年目で歩かない子が多かった」と述べており、一歳未満での歩行は珍しかった。さらにその上、一升餅を背負える子供など、極めてめづらしかったに違いない。その一升餅がブツセイ餅であつてみれば、一歳未満で歩行する子供がいかに忌避されていたかがよく理解できよう。

増森では、「二年目に歩く時はブツツイモチといって風呂敷に餅をくるんでしよわせた」と言う。一年目に歩く事それ自体はかなり稀な現象であり、「昔は一年目にはなかなか歩けず、一年三カ月で歩く子が多かった」と言う程である。ここからも、「一年目に歩く」子供に限定して、ブツツイ餅を背負わせた親族の本来の真意を窺う事ができる。もし健康な証拠として評価していたのであれば、ブツツイ餅などという名称はつけなかった筈であり、また一歳未満の子供に限定する必然性もなかったのではあるまいか。

登戸では、「二歳の誕生日前に歩けるようになる」と、一升餅をかつがせる。これをブツツイ餅」という。「一歳の誕生日前に歩けるようになる」という前提条件は極めて重要である。裏を返せば、もし歩けなければ餅をかつぐ儀礼など存在し得ないのである。かつては一オシヶ月程で歩くのが普通であり、この観点に立てば一歳未満の歩行そのものが異常であったことになる。異常を正常に戻すための装置が、ブツツイ餅であった。即ち、この餅は縁起直しの意味を持ち、転倒を意図した餅を背負う事により、一歳未満で歩かなかった事にするのである。

東方でも、「ムカリツキ（誕生日）前に歩き始めると一升餅をかつがせた」とある。ここでは明言されていないが、この一升餅はブツツイ餅という名称であったと推測できる。「ムカリツキ前に歩き始めると」という前提条件は大きな意味を持つ。満一歳過ぎて歩いた子供の場合、一升餅をかつぐ義務は無く、当然タブーとして突き倒される事もない。かつては一升餅を担ぐ事は、決して名誉な事ではなかったのである。

麦塚では、生後一年目「この時歩けるようになってくる子には、力もち」といい、しよえるだけ背おわせ、嫁の実家へもっていく」という。子の親にすれば、満一歳で歩ける子供は少なく、歩くだけでも大変なのに、その上に餅を背負って立つのであるから、子供の怪力さを誇りたいのである。その気持ちは個人的に共感できる。しかし、伝統的な世間の価値観からすれば、その怪力さは異常であり、秩序を乱すものとして畏れられ、恐怖の対象となる。世間全体から浮き上がってしまい、その怪力さ故にヒト扱いされない場合が出てくる。これを危惧して、殊更に転倒を意図したブツツイ餅と名付けられた一升餅を背負わせ、さらにその重さでも倒れなければ後ろから突き倒すのであった。本来はこれらのメッセージが、初誕生儀礼の餅背負いに込められていたのである。ところが、こ

これらのメッセージを完全に骨抜きにして、「力もち」と解釈すれば、初誕生儀礼そのものの存在意義を大きく捩曲げてしまうことになる。即ち、初めての誕生日を迎えるに際し、背負った餅の数を誇示するという極めて平板なものに変質する。元来、満一歳で立つだけでも少数なのに、その上に餅を背負わせるのであるから、その数は極く少数となる。例外的なものに畏れおののくという神秘性は薄れ、単なる力誇示として解釈してしまう事は、それだけ民俗世間の心性を貧弱なものにしてしまう。恐らく、産育環境の変化により、一歳未満で歩き始める子供が珍しくなくなった状況を背景として、従来の縁起直し説とは異なる「力もち」伝承が新たに発生したものであろう。両者の間には、一歳未満の歩行を否定するか肯定するかの決定的な違いがあり、全く正反対の評価が展開されるのでありその落差は極めて大きいものがある。

6の戸田市では、「この日（初誕生日）までに歩くと、その子が大きくなってから、遠くに出てしまつとか、跡取りになれないとかいつて、よくないように伝えられた。そこで、この日の祝いには、ブツエモチなどいつて、一升餅をついて、風呂敷などに包み、子供にせおわせて、ひっくり返るまで歩かせることが行われた。いつまでも歩いていると、わざとひっくり返したものである」といつ。一歳未満の歩行は、その子の将来にとって決して良い徴候を示すものではなく、生家とは無縁な存在になるとか、跡取りになれないなどと称し、不吉なもの・よくない事とされていた。身体機能の面だけから見れば、一歳未満の歩行は頑健な証拠であり、褒めるべき事柄以外の何者でもない。にもかかわらず、「遠くに出てしまつ」とか「跡取りになれない」など、「よくない」と評価される。さらにそれだけでなく、風呂敷に包んだ一升餅を背負わせ、倒れるまで歩かせる。まさに、文字通りブツエモチなのであつた。ブツエ餅の面目躍如という所である。さらにそれでも倒れずいつまでも歩いていれば、故意に引き倒すのである。初誕生の一升餅が、「力もち」などと称され、これを背負つて歩く事が称賛されるなどという発想は、6の本来的な事例を見る限り、どこにも見当たらない。一歳未満で餅を背負つて歩くという同一の現象であつても、時代の推移による斬り口の変化によつて、かくも見事に正反対の評価が下されるのであつた。一升餅を背負つて、いつまでも倒れずに歩く事は、現在の価値観からすれば極めて丈夫な子供の証明のようなものである。にもかかわ

らず、こういう子供に限って故意に引きずり倒されるのであるから、その背景にはやはり単に身体上の丈夫さだけでは説明し尽し得ない大きな何かが隠されていると言えるよう。

7は6と同じ戸田市に属すが、美女木下笹目の事例である。「誕生日に米一升で搗いた餅を背負わせ歩かせた。上手に歩けると、力持ちになるといい喜んだ」という。評価は6と正反対である。誕生日に歩いた子供に餅を背負わす所までは同一であるが、6の如く「ひっくり返るまで歩かせ」たり、いつまでも歩いていると「わざとひっくり返した」りする事もない。また、これを「よくない」事という如く否定的に評価せず、逆に「力持ちになるといい喜」ぶのであった。ここでも、身体機能の面だけからしか評価しないという表面的解釈に終止する。初誕生に於ける、本来の世間的・文化的解釈はここでも全く欠落していたのであった。

8は和光市の事例であるが、「誕生日前に歩けるようになったすべての子供に」、一升餅を背負わせていた。これは、「往時は一歳前に歩き出す子は今日ほどこいかなかったが、順調にあまり早く歩き出すことを良くない事として嫌ったため」という。「誕生日前に歩けるようになったすべての子供」とは、かなり徹底した表現であるが、「往時は一歳前に歩き出す子は今日ほどこいかなかった」と述べる如く、一歳未満で歩く子供は結構少なかった。また、少ないために珍らしがられ、目立っていた。この子供を対象として、一升餅を背負わすのであり、未だ歩かない殆どの子供達は餅を背負う必然性など無かった。例外的または異常なためか、一歳未満で歩く子は「良くない」として嫌われていたのである。「順調にあまり早く歩き出すこと」と表現する如く、この評価には二つの規準が錯綜している。

「順調」という表現の裏には、身体機能の良好な発達という意味が含まれ、肯定的表現である。ところが、「あまり早く歩き出す」という表現には、人並外れた、または異常というニュアンスが込められ、否定的表現となり「良くない」として嫌うに繋がるのである。伝承者自身、二つの相反する価値規準の間で、気持ちが激しく揺れ動くものの、結果的に伝統的な価値観を採用するのであった。ここでも、戦後の身体上の驚異的な発達が、伝統的社会の価値観を大きく覆しつつある状況を確認することができる。

さて、8は『和光市史民俗編』の事例であるが、この中には上福岡市と大井町の事例も紹介されている。上福岡

市の場合、「誕生日前に歩けるようになった子供をオニッコ（鬼っ子）」と呼び、大井町ではこの時転ばせないと女の子は遠くへ嫁に行けない」という。特に上福岡市のオニッコの事例に注目したい。今まで東北の青森県下から埼玉県下に至るまで述べて来たが、山形県荘内地方で唯一例だけ存在していた。「誕生日前に歩き出すと、満一か年目の誕生日に一升餅を背負わせる。それでも歩くと後ろから突き倒す。それでも起きて歩くとオニゴ（鬼子）」といつて捨てる」^⑧のであった。上福岡市の事例は、東北から順に眺めた場合、管見の及ぶ範囲では二番目に登場し、極めて希少なものである。山形県下の場合、上福岡市で誕生日前に歩けるようになった子供を単純にオニッコと呼ぶのに対し、誕生日前に歩き出すだけでなく、一升餅を背負わす事、それでも歩くと後ろから突き倒す事、それでもめげずに起き上がったて歩く子供のみがオニゴと呼ばれる。山形県のオニゴの方が、四層構造になっており、より厳しい条件付けがあった。身体機能の上だけで判断すれば、山形県のオニゴは極めて超人的な怪力を持ち、まさにオニゴと呼ばれるにふさわしい。オニゴは、人々の称賛を浴びるところか逆に捨てられるのである。超人的で怪力を持つ故に、ヒトの子とは見做されず、オニゴ即ち鬼の子として畏れられ、遂には人間の範疇に入れられずヒトの領域から外へ捨てられるのであった。

上福岡市のオニッコも、かつては山形県のオニゴと同様に四重の条件をクリアしなければ、鬼の子として認定されなかったのではなからうか。オニゴと呼ばれ、人々から畏れられる背景には、遥かに人間離れした身体能力の強靱さが認められていた。

換言すれば、誕生日前に歩けるようになった子供をオニッコと呼ぶ上福岡市の事例は、誕生日前に歩いただけでもオニッコとして恐れられていた事を意味する。つまり、誕生過ぎてほぼ一歳三ヶ月程度で歩くのが普通の子供であつた筈なのに、異常に早いという意味でオニッコとされていたのである。だとすれば、本節の冒頭に述べた如く埼玉県下では一歳未満で歩く子供の事例は全体の七割の地区で確認されており、埼玉県下はオニッコだらけになってしまう。オニッコの規制緩和現象が出現する事になる。七割近くの地区でオニッコが出現するようになった事と初誕生儀礼そのものの質的变化とは互いに密接に繋がり合う。かつてのオニゴは畏敬の対象とされていたが、今日

のオニゴは畏怖の念など既に無く、単に成長の順調な子として褒められるだけの、極めて薄っぺらな存在になり下がってしまったのである。子供の飛躍的な成長の早期化は、豊饒な民俗世間の「鬼子」思想の衰退化へと繋がり、思わぬ方面に波紋を広げるのであった。

大井町の場合、女の子は初誕生日に一升餅を背負わせて転ばせないと、遠くへ嫁に行けないと言う。転ばずに歩く子をオニツコとして悪とすれば、転ぶ方を望んでいるのであり、親としては娘をできるだけ遠くへ嫁がせたいと考えているのであろうか。いずれにしろ、大井町でも一歳未満で歩く事を歓迎していなかった。

10の和光市下新倉では、初誕生日に際し、「早く歩き過ぎるのを嫌」い、「一升餅を背負わせていた。丸餅で、稀に餅を背負わせても転ばないようなことがあると、更に二升餅を背負わせたり、後から押したりして、必ず転ばせるもの」としていた。ここでも、オニゴとまでは言わないものの、一歳未満の歩行を忌避していた。一升の餅背負いは、単なる祝儀などではなく、転倒を意図したブツツエ餅であった事がわかる。さらに、それで倒れなければ倍の二升餅にし、それでも倒れず歩けば後ろから突き倒すのであった。何がなんでも、一歳未満の歩行を忌避し、儀礼的に歩かなかった事にしたいという意図が、「必ず転ばせるもの」という伝承からダイレクトに伝わって来る。いかに一歳未満の歩行を忌避していたかが、よく理解できる。その背景には、8の如きオニツコ伝承があったと考えられる。

さらに10では、「初誕生日の日に歩けない子も少なくない。このため、この日に行なわず、実際に歩行が出来るようになってから（餅背負いを）行うこともあった」という。これは、本末転倒と言うべきであろう。かつては、初誕生日に歩けない子供が殆どであり、歩ける子供など極めて稀であった。ところが、産育環境の変革により、格段の進歩を遂げ、誕生日に歩ける子供が急激に増加する。これによって、歩けない子供が相対的に減少し、この段階で餅背負いの意義が完全に骨抜きにされるのであった。本来は、背負い餅の負荷によって倒す事に意味があったのであるが、10の現在では餅を背負って歩く事自体に意味を認めるようになる。満一歳で充分に歩ける子供が少なという現実直面し、餅背負いを「実際に歩行が出来るようにな」るまで延期するのであった。本来ならば、一

歳未満で歩かなければ、このような面倒な餅背負いなど不要であつた。縁起直しとしての餅背負いであるから、逆しないに越した事はなかつたのである。ところが、産育環境の変革で多くの子供たちが一歳未満で歩きだすと、逆に餅背負いの方がメジャーとなり、餅背負いをしない方が肩身が狭く感じるようになる。産育環境の変革は、このように人々の価値観までも逆転させるに至るのであつた。この段階で、一歳未満の歩行は望ましきものとして位置付けられてしまつたのである。

11は秩父市浦山の事例であるが、「生後一か年目を祝つて、子供に誕生餅を背負わせる。立ち立ち誕生とも言い、誕生日に立つことまたは歩くことができれば、成長が良好であることを示す」という。これ程ストレートに一歳未満の歩行を歓迎する事例は珍しい。8のオニツコ伝承を始め、殆どの地区では一歳未満の歩行は不吉な事柄であり、縁起直しとして転倒を意図した餅背負いが行われていた。満一歳の子供に餅を背負わせる現象は他と共通するが、それに至る動機付けがここでは全く逆転している。本来は「祝つ」のではなく、「祝い直し」であり、餅背負いは明らかに転倒を意図していた。「立ち立ち誕生」は、満一歳の歩行を誇示する如き言い廻しであるが、かつては必ずしも「成長が良好であることを示す」ものではなく、むしろ逆にオニツコと称され畏怖の対象であつた。「立ち立ち誕生」という言葉遊びの裏には、満一歳の誕生日当日から二足歩行を始めるべきだといつ一つのケジメ思想があつた。

12は秩父市品沢の事例であるが、ここでも子供の初誕生日に餅を背負わせる。「一升餅を背負つことができれば、子供が順調に成育していることを示す」という。一歳未満の歩行に関するタブー性は、微塵も見られない。確かに、一歳で一升餅を背負つて歩く事は順調な成育の証拠かもしれないが、それは身体機能の側面から見ただけの判断であり、かつての民俗世間における価値判断はそんな浅薄なものではなかつた。一歳未満の歩行、さらに餅を背負つての歩行など、ヒトとして絶対に許される行為ではなく、それはまさに鬼畜の所業と見做されていたのであつた。殆ど他の類例に於いて、一歳未満で歩けば縁起直しを行なつており、順調な成長として評価する^{11・12}のケースは極めて稀なものである。恐らく、何らかの要因によって、かつての伝統的解釈が忘れられた後に、新たな今風の

解釈が加えられたものであろう。

13の狭山市では、「誕生を迎える前に子供が歩き始めるようになるのはあまりよくない」事柄であり、「故意に突いて転ばし」ている。一歳未満の歩行は、タブーであったのである。ブツ工餅を子供に背負わせる儀礼は、「故意に突いて転ばし」す行為と連動していたと考えられる。報告にもある如く、「生まれて初めての誕生日を迎えたばかりの子供」が、一升ものブツ工餅を背負っても、「なかなか歩けるものではない」。従って、この儀礼は「歩けということではなく」、「はいはいをして手足を十分に鍛えるという、われわれの祖先が長い経験から生み出した」ものだという。手足を十分に鍛えるためという意図が有ったか否かは不明であるが、ブツ工餅に象徴されるように、少なくとも満一歳になるまでは二足歩行が禁止されていたのであった。

14の草加市柿木町では、「誕生日までに歩いた子供」には「餅を背負わせ、背負った数だけの餅を近所に配」る。餅背負いの条件として、「誕生日までに歩く」事が挙げられている。裏を返せば、誕生日までに歩かなかった子供に対しては、誕生祝いは無かった。仮りに誕生祝いはしても、子供に餅を背負わす儀礼は存在しなかったと判断できる。背負った数だけの餅を配る行為は、一見すれば力の誇示とも取れるが、別稿で詳述した群馬県下の事例を考慮すれば、厄落としての意味と解釈し得る。「背負った数だけの餅」に注目すれば、何個まで背負えるかその限界に挑戦したわけである。換言すれば、倒れるまで背負わせたのであり、この儀礼の趣旨は本来ここにあった。即ち倒す事が本来の目的であった。だが、個数が問題にされるようになった段階から、力自慢の儀礼に変質しかけている。この状況がさらに展開されれば、12の如く「子供が順調に成育していることを示すもの」として評価されるのである。

16の東松山市では、「生れてはじめての誕生日には誕生祝いを行う」。この場合、一歳未満で歩いた場合という限定条件は無い。歩いても歩かなくても、満一歳になれば誰でも行なっていた。「乳児の誕生日がそれぞれ違うため家族単位で祝う」という、至極当然な話である。ところが、「もし誕生日までに歩ければ紅白の餅をつき、歩けなければ赤飯を作り」、破魔弓を買った家々に配るのであった。歩けるか否かで、贈る品が違えてある。さらに歩け

る子供の場合、一升餅を背負わせるが、この餅と配る餅が同一であつたか否か不明である。恐らく、贈られた破魔弓のお返しであるから、背負つた一升餅だけでは足りないため、全く別物の餅を配つていたのである。満一歳の段階では、仮りに歩いたとしても一升餅を背負わせれば、「ほとんどが歩けないが、親たちは二丁三歩歩いただけでも『歩いた歩いた』と喜び、良く歩けた場合は二升餅を背負わせ」ている。明治以前の栄養状況では、一歳未満で歩く子供など稀であつた。従つて、一升餅を背負わなくてもほとんど歩けない状態があたり前であり、一升餅を背負つて歩くなどという現象は極めて異常なのであつた。異常を通り越して、恐怖すら感じていたのではなからうか。「二丁三歩歩いただけでも『歩いた歩いた』と喜び」現象は、かつては驚きと共に恐怖感を伴つて眺められていたと考えられる。人間離れの所業に驚き、何が何でも歩かなかつた事にしたいという意図の現れが、二升餅背負いに見られる。現状では、「良く歩けた場合は二升餅を背負わせ」とあり、子供の手柄の如く記されているが、かつては全く逆の意味が込められていたのである。尤も、二升もの餅を背負わせれば、いくら健脚な子供でも倒れたであらうし、倒すための本来的意図がこの儀礼の中に残されていたという見方もできる。歩く事を歓迎するような現在の風潮でも、儀礼そのものに注目すれば、しっかりと元の姿を留めていたのである。

さらに、「早く歩けるようになると家に寄り付かなくなるといふことで二升餅を背負わせ、ころばせる家もある」という伝承もあり、一歳未満の歩行忌避は部分的にはあるが、家によってはしっかりと残されている。

17の行田市忍では、「誕生祝いには赤飯をたいて祝つ」と言う。この場合、一歳未満で歩いても歩かなくても赤飯で祝つていた。なぜなら、「誕生前に歩いたときには、一升餅を背負わせて歩かせた」とあり、一升の餅背負いは一歳未満で歩くという前提条件が必要であつたからである。歩けなければ、餅を背負う儀礼など必要になつた。やつとの思いで歩く子に敢えて一升餅を背負わせる背景には、立ち歩き阻止の意図が感じられる。単なる祝いであれば、赤飯で祝うだけで十分なはずであり、倒れる可能性が多分にあるにもかかわらず殊更に餅を背負わせるのは、どう見ても不自然である。

18の岩槻市では、「初誕生までに立ち歩く子には、この日（満一歳の誕生日）ブツツイモチをシヨワセルといつ

て、家でついた四丁五寸（二丁一五センチ）の丸い白餅を風呂敷に包んで背負わせる。最近は餅米一升を背負わせるようになった家が多い。初誕生には赤飯を炊いて祝う」という。ブツイ餅という名称から既に判断できるのだが、この餅は子供の転倒を意図して背負わせたものであり、未だ歩けない子供に対しては餅を背負わす必要は無かった。「初誕生には赤飯を炊いて祝う」とある如く、歩く子も歩かない子も、初誕生には赤飯で祝うものであった。一歳未満で歩く事はここでもタブーであり、今日程歩ける子供が多くなかった時代は、殆ど餅を搗く必要もなかったであろう。一歳未満で歩き始めた子供に対してのみ、一升餅を背負わせて倒し、歩かなかった事にしようとしていたのである。

ところが、時代の推移によって価値観が逆転する場合も見られる。同じ岩槻市内でも浮谷や馬込では、「どの位歩けるか、どの位しょうか、力があるかな」と力試しをするのだと説き、誕生前に歩く子を悪いとは言わない」という。恐らく、産育環境の変革により一歳未満で歩く子供の数が増え、決して珍しくはなくなった段階から、むしろその事が手柄として評価されるようになったのであろう。誕生前に歩く子を「悪いとは言わない」という浮谷や馬込の伝承は、新たな文化の発生とも言える。その結果餅を背負って歩いた距離や、背負った餅の重さが競われるのである。このような新たな状況が発生しても、背負う餅をブツイモチと呼ぶのであるから、古風な名残りはなかなか消えないものである。

同じ岩槻市内でも市宿や飯塚では、前述の浮谷や馬込とその伝承内容が全く逆転する。市宿では、「普通は初誕生から三日して歩くのに、誕生前に歩きはじめた子は良くないので、「餅をしょわせる」という。やはり、誕生前に歩く事は不吉な現象であり、その不吉さを払拭する意味で餅を背負わせた事が明確にされている。恐らく、ペナルティーとしての餅背負いであり、餅を背負ったの転倒の中に、まだ歩かない事にするという儀礼的意図を感じ取り得る。また飯塚では、「初誕生より早く歩くとガ二股になるといい、餅を背負った子供が尻餅をつくとき」という。脚の骨がまだしっかりとして固まらないうちに、二足歩行によって重圧をかければ、外側に彎曲し所謂ガ二股になってしまう可能性がある。昔の人々はこの事を経験的に知っていたのかもしれない。しかし、この事が一歳

未滿の二足歩行禁忌の根本的原因とは考えられない。もしそう仮定すれば、ガ二股伝承は他に多くの類例があつて然るべきであるが、埼玉県下では例外的にこの一例のみであり、全国の類例を探しても管見の及ぶ範囲では他に見出し得なかった。物理的理由以前に、民俗世間の価値観に反していたために忌避されていたようである。現在我々は倒れる事をシリモチをつくと表現するが、案外そのルーツはこの儀礼にあつたのかもしれない。

19の北葛飾郡庄和町倉常では、誕生祝いの「誕生餅」といつて、里方にアンピン餅をくばる。このとき里方からは着物を贈る。かつては誕生前から歩けるようになった子には、この日に一升餅をしよわせて歩かせ、わざとつづいて転ばせた」と言う。文脈から判断すれば、誕生餅は一歳未滿の歩行の有無に關係なく、満一歳になったその日に祝つたものである。但し、一歳未滿で歩いた子に対してのみ、一升餅を背負つて歩かせている。一歳未滿の歩行が例外的に少ない時代であれば、一升餅を背負つただけで簡単に子供はその重みに耐え兼ねて倒れていたであろう。それでも倒れずに踏んばつて歩く子供に対しては、「わざとつづいて転ばせた」のである。餅背負いの意図は転倒にあり、早すぎる事なく人並みの成長を願う親たちの価値観が如実に表わされている。この場合、子供の転倒を意図して、二段構えの仕掛けが施されていた。

また20の北葛飾郡杉戸町下高野では、初誕生には「赤飯や餅をつくり、神棚に供えたり近所に配つたりする。また、子供が誕生日までに歩いたときは、ブツツイ餅といつて餅を背負わせ」ていた。ここでも、初誕生祝いと餅背負いは全く別個の行事として認識されている。一歳未滿の歩行の有無にかかわらず、満一歳になれば無条件に赤飯や餅を作り、神棚に供えたり近所に配つて祝つていた。ところが、一歳未滿で歩いた子の場合だけは、これにブツツイ餅が加わり、餅を背負わせる。名称から、また儀礼の形式から判断すれば、子供の転倒を意図していた事は明白であり、明言こそしないものの一歳未滿の歩行がタブーであつた事のメッセージを我々に伝えている。

21の人間郡日高町高麗本郷では、初誕生に「赤飯をつくり家族で祝い、親元や近所の世話になつた人に配る」が「一歳の誕生日前に歩くことができた子供がある家では、一升のもち米でつきあげた一升餅をつくり、その餅を子供に背負わせて宮参りをし、里方にあいさつに行く」と言う。ここでも、満一歳の誕生日は初誕生として、この日

までに歩く子も歩かなかった子も同様に赤飯で祝う。だが、既に歩くようになっていた子には特別の行事がある。即ち、一升餅を搗き、これの子供に背負わせて宮参りをし、さらに里方にまで挨拶に行くのである。歩くといつても、やっとの思いで立ち歩きをする程で、一升餅を背負わせればすぐ倒れていたのではなからうか。実際に、一升餅を背負ったまま宮参りをしたとはとても考えられない。恐らく、誰かが後ろで支えていたが、それとも形だけ背負った事にして宮参りをしたのであろう。母親の里にまで餅を背負った形で挨拶に行くのであるから、誕生日前に歩いた子供は大変である。歩かなかった子供は、これらの負荷は一切掛けられない。全体の文脈から判断すれば、歩いた子供は宮参りや里方への挨拶など手柄のように評価されているが、かつては異常児と同等に見做されていたのではなからうか。一升餅を背負ったままの宮参りや里方への挨拶は、どう考えても不自然であり、むしろ虐待にも等しい。倒れて欲しい、あるいは歩かなかった事にしたいという意図がこの儀礼の裏にあるような気がしてならない。

22の比企郡小川町子貝戸では、初誕生には親戚や近所に餅を配るが、他に「一升餅を背負わせるといって、ふるしきに餅を包んで肩から背負わせ」ている。この場合、一歳未満で歩けばという条件付けは無い。後に詳述するが、埼玉県下三一例の中で、「一歳未満で歩けば」という前提条件の下で餅背負いをする事例が二三例で約七四%を占めるのに対し、前提条件の言及が無く餅背負いをする事例は約三分の一の八例で約二六%に過ぎない。餅背負いは、一歳未満で歩いた場合に限定され、歩かなければ餅を背負う必要もなかったという本来の形式が、数字の上にも明確に現われている。この前提条件の無い八例二六%も、元は「一歳未満で歩けば」という条件があったものと考えられる。

23の秩父郡大滝村では、初誕生には実家の両親等を招いて祝うが、この時「親戚からは履物（主に長靴）が贈られる。誕生餅といって、小豆餡（昔は砂糖などなく塩餡であった）の入った餅を作り、組の氏神さまに供える。そして五つぐらい紙に包んだり、お重に入れて風呂敷に包み、子どもにしよわせる。家族の者が手を打って囃し、歩かせる。このとき、『しよってヤイヤイヤム』といってつきとばすものだといふ。これは子どもに旅立ちの真似を

させる」ためと説明する。ここでは、一歳未満で歩けばという条件付けは無い。全体の文脈から判断すれば、一歳未満で歩いた子も歩けない子も同一の儀礼を施していたのであろう。かつては一歳未満で歩く子はかなり少なかった。仮りに歩けたとしても、つかまり立ち程度であつた。そんな子に空の重箱を背負うすだけでも倒れていた筈である。さらにその重箱に餠餅五個も入れるのであるから、転倒は必至である。にもかかわらず、家の者が手を打って囃しながら子供を歩かせる。誰かが後ろで倒れないように支えない限り無理である。「歩かせる」という表現は、囃したてだけでなく、物理的支えの存在を実感させる。立てない子供にいくらまわりが囃したてても、歩けないのは当然であろう。親戚から履物が贈られる所から判断すれば、この日子供はたとえ歩けなくても、儀礼の上では歩いた事にしなければならぬ。鳴り物入りで囃したてて歩かせる必然性は、この辺にあつたのであろう。儀礼上歩いた事にしかかと思えば、その直後、「しょってヤイヤヤム」と唱えながら子供を突きとばす。子供にとれば、餅を背負つて無理やり歩かされ、その上さらに突き倒されるのであるから二重三重の災難である。この儀礼は、決して単に歩く事を奨励するためのものではない。かなり複雑であり、奥深さを感じる。ヤイヤヤムという唱え言が何を意味するのか不明であるが、子供の突きとばしと共に、「旅立ちの真似」と説明する。これら一つ一つの儀礼を個別に見れば、相互に矛盾し解釈に苦しむ。しかし、全体を一個の構造物として見れば、一筋のドラマとして解釈する事も可能である。即ち、満一歳の誕生日を規準として、その日以前は歩く事が禁止され（餅を背負いながら無理に歩かされ、その直後突き倒される）、一歳過ぎればどんな子供でも必ず歩かなければならない（履物の授受・餅背負いを伴った強制的歩行・旅立ちの真似という説明がついた突き倒し）という粗筋である。満一歳の誕生日は、現在の我々が考える以上に、かつては極めて重要な異次元世界へ行く程の通過儀礼の意味が含み込まれていたのである。この事は、「旅立ちの真似」伝承からも窺い得る。²³の場合、全体の構造が元の姿を損う事なく、バランスよく残されており、初誕生儀礼を解釈する上で、非常に貴重な資料である。他の多くの事例は、部分的なパーツしか残されておらず、そこから全体を推し量る事は至難である。この意味からも、²³の事例は一地区で殆どの要素が共存するため貴重である。

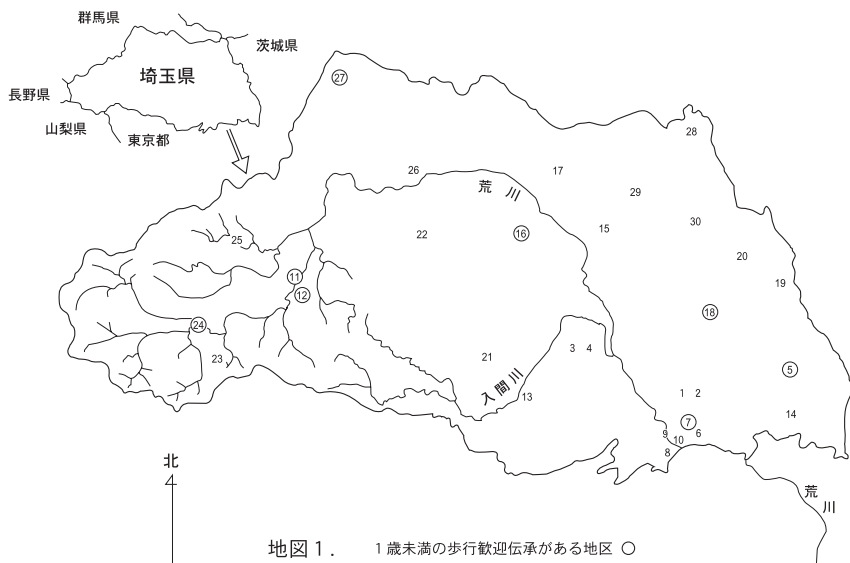
24、27の四地区では、初誕生に餅や赤飯で祝い、子供に餅を背負わせている。しかし、その子供が実際に餅を背負ったか否か、また一歳未満で歩いた子に限定されていたか否かも不明である。報告書の内容はかなり簡略な記述であり、元の姿から大きく逸脱している状況が窺える。

このような状況の中で、28の北埼玉郡北川辺村飯積の事例はまだ幾分とも古風を留めている。「誕生祝いにはアンピン餅をくば」り、「この日までに歩き出した子供に、アンピン餅を背負わせることもある」という。餠餅を配るのは、満一歳の誕生日を迎えた子供が居る家であり、一歳未満で歩いたか否かは恐らく関係なかったであろう。だが餅背い儀礼はこれとは全く別物であり、この場合「この日までに歩き出した子供」に限定される。まだ歩けない子供は、餅を背負わされる必然性は無かった。「餅を背負わせることもある」と言う如く、餅背い儀礼の存在自体がかなり怪しくなりつつあるが、それでも一歳未満で歩く子と歩かない子の区別は明確につけている。歩く事はここでもタブーであった。この意味が忘れ去られると、24、27・29の如く歩かなかった子も歩いた子と区別なく餅が背負わされるのであった。歩けないのであるから、転倒目的の餅を背負つても本来の意味を持たない。ここから、「丈夫に育つため」などという別の解釈が発生するのである。

30の南埼玉郡久喜町吉羽では、初誕生祝いに出産の祝いをもらった家に返礼として餅を持参する。この日「誕生までに子供が歩いた家では大きい重箱にいっぱい餅を入れて子供に背負わせる」のであった。誕生祝いとしての餅の配布は歩く子も歩かない子も共通であるが、歩く子供に限って大きい重箱にいっぱい詰まった餅を背負わせる。この餅は、見るからに重そうではないか。やっとの思いで立ち歩く子供が、これを背負うのであるから、倒れないわけがない。やはりここでも一歳未満の歩行はタブーであり、転倒目的で餅が背負わされていたと判断し得る。

五、一歳未満の歩行に関する肯定と否定

31は「埼玉県の祝事」からの資料であり、一応県下全域を視野に置いた上での記述である。「寄居町や秩父地方



地図 1. 1歳未満の歩行歓迎伝承がある地区 ○

では、一般にタンジヨウ餅といって、背負ってたとえ一歩でも歩くと家族が大喜びをしたが、他のところでは必ずしも喜ばない」と言う。同一県内に於いても、正反対の評価が見られるのが現状である。

最初に、一歳未満の歩行歓迎伝承から纏めておこう。5の越谷市麦塚では、「歩けるようになっていた子供には『力もち』といい、しよえるだけ背おわせ、嫁の実家へ」持って行く。7の戸田市美女木下笹目では、「一升餅を背負って『上手に歩けると、力持ちになるといい喜』ぶ。11の秩父市浦山では、「立ち立ち誕生ともいい、誕生日に（餅を背負って）立つことまたは歩くことができれば、成長が良好」という12の秩父市品沢では、「一升餅を背負うことができれば、子供が順調に成育していることを示す」という。16の東松山市では、歩ける子供に一升餅を背負わせるものの、殆どの子供は歩けない。しかも中には「二、三歩いただけでも『歩いた歩いた』と喜び、良く歩けた場合は二升餅を背負わせ」る。18の岩槻市浮谷や馬込では、「どの位歩けるか。どの位しょうか、力があるかな」と力試しをするのだと説き、誕生前に歩く子を悪いとは言わない。」24の秩父郡大滝村滝之沢では、「子供には餅を背負わせるが、一升餅が背負えるとよい」と言う。27の児玉郡上里村

金久保では、「子供が力持ちになるように」といって、餅を重箱に入れてふるしきで包んで背負わせ」ている。

以上、八地区で一歳未満の歩行を歓迎する伝承が判明した。これを分布図に落としたものが地図1である。この分布状況を見れば、「埼玉県の祝事」で言う如く、「寄居町や秩父地方では、一般にタンジョウ餅といって、背負ってたとえ一歩でも歩くと家族が大喜びをした」という表記は必ずしも正確ではない。23は秩父地方に属する大滝村であるが、「家族の者が手を打って囃し」て歩かせており、一見大喜びしてそうに見えるが、結果的には「旅立ちの真似をさせる」という事で無理に突き倒すのであり、単に喜んでいるのではない。むしろ、歩かなかつた事にしたという心意を感じ得る。秩父地方でも、かつては23の如き伝承が支配的であったものではなからうか。通過儀礼的意図が稀薄になり、単なる力自慢と解釈されるようになった段階で、一歳未満の歩行が歓迎されるに至ったと考えられる。歓迎伝承は、県西部の秩父地方だけでなく、県東部の5・7・18や中部の16、さらに北西部の27にも分布し、これら全八例はほぼ県下全域に散在し、地域的特色は見出し難い。歓迎伝承は、5・7・27の「力持ち」、12の「順調な成長」、18の「力試し」など、肉体的成長を重視する点から判断すれば、恐らく一歳未満の歩行のタブーが忘れ去られた後に登場した新たな解釈であろう。

一方、否定を明言する伝承も多い。1の浦和市では、「二年にならないで歩くのはよくない」と言い、一升のブツツエモチを背負わす。3では、子供を裸にして盥の中に立たせて一升餅を背負わせるが、このとき「足がつくと悪いといって子供が立つとわざとこぼせ」る。また、所沢市富岡では「一人でこぼれないと不幸だ」という。5の越谷市平方では、一歳未満で歩くようになった子にはブツツイ餅を背負わせるが、「このような子には悪い運勢があるとい運命占い」をしてもらう。6の戸田市では、初誕生までに歩くと「大きくなってから、遠くに出てしまうとか、跡取りになれないとかいって、よくないように伝えられ」ており、一升のブツツエ餅を子供に背負わせ、「ひっくり返るまで歩かせ」たり、「いつまでも歩いてるとわざとひっくり返したもの」という。8では、誕生前に歩けるようになった子供をオニッコ（鬼子）と呼ぶ。また「順調にあまり早く歩き出すことを良くないとして嫌った。10の和光市下新倉でも、「早く歩き過ぎるのを嫌った」ため、一升餅を背負わせる。「稀に餅を背負わせても転

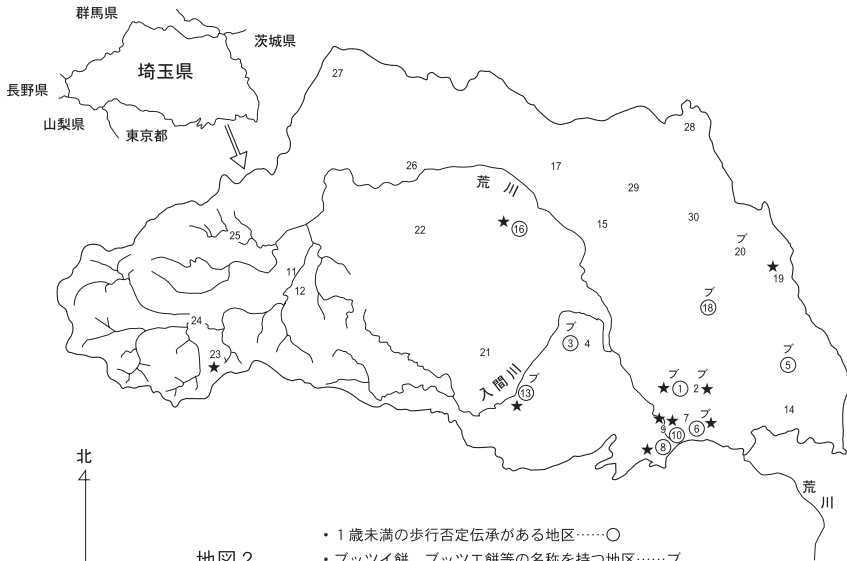
ばないようなことがあると、更に二升餅を背負わせたり後から押したりして必ず転ばせるもの」であった。¹³の狭山市では、誕生を迎える前に子供が歩き始めるようになるのはあまりよくないといい、故意に突いて転ばしたりする風習がある。¹⁶の東松山市では、「早く歩けるようになる」と家に寄りつかなくなるといふことで、二升餅を背負わせ、ころばせる」家もあった。¹⁸の岩槻市市宿では、「誕生前に歩きはじめた子はよくない」ので「餅をしよわせ」ていた。また飯塚では、「初誕生より早く歩くとガ二股になる」ため、「餅を背負った子供が尻餅をつく」と良い」と言う。

前述の歓迎伝承が八例であるのに対し、忌避伝承は九例である。数の上では、あまり大差は感じられない。しかし、儀礼全体を通覧すれば、その差は見た眼以上に大きなものがある。「よくない」・「悪い」・「悪い運勢」・「不幸」・「跡取りになれない」・「遠くに出る」・「オニッ」・「ガ二股になる」等々、様々な理由が挙げられるが、「よくない」という漠然とした説明がめだつ。恐らく、その背景となるものが余りにも大きいため、一言では説明しきれなくてこのような言い方になってしまつのであろう。歓迎伝承の場合、殆ど「力持ち」で終止し奥深さは全く感じられない。

さらに、忌避伝承は総て無理やりの転倒と連動しており、例外なく子供は餅を背負うことによつて、それでも倒れなければ故意に引きずり倒されている。これらの事例を見れば、抑々初誕生の一升餅背負いは何のために行なっていたのかという根本的な問題に突き当たる。前節で詳述した如く、餅背負いの実施は「一歳未満で歩けば」という前提条件の下で行なう地区が全体の七四%を占める。残りの二六%はその前提条件は明記されていない。しかし、明記されていないからと言って、一歳未満で歩かなくても餅を背負っていたと簡単に判断できない。「餅背負い」という点から考えれば、既に立ち歩いていた事が暗黙の前提となっていたふしさえ感じられるからである。恐らく、明記されていない二六%もその大半は実際に一歳未満で歩いた子のみを餅背負いの対象としていたであろう。

この事は、背負い餅の名称にも如実に反映されている。

・ブツイモチ。1・2・5・5・5・5・5・18・20（八例）



地図 2.

- ・ 1 歳未満の歩行否定伝承がある地区……○
- ・ ブツツイ餅、ブツエ餅等の名称を持つ地区……★
- ・ 意図的転倒……★

・ ブツエモチ。 1・6・13 (三例)
 ・ ブツイモチ (ブツヨワセ餅の意)。 5 (一例)
 ・ ブッセイモチ。 3 (一例)
 ・ ブツワリモチ。 3 (一例)
 ・ ヒッチヨイモチ。 3 (一例)
 ・ タチモチ 3 (一例)

埼玉県下ではブツツイ餅が最も多く、五地区で延べ八例も見られた。次いでブツエ餅が三例あり、他にブツセイ・ブツワリ・ヒッチヨイ・タチ餅が各々一例である。ブツセイは「ぶち背負い」とも解釈できるが、ブツツイ・ブツエが転倒またはそれに伴う坐りを意味していた点を考慮すれば、餅の重みで尻餅をつく事を期待した名称であろう。ブツワリ餅と極めて近い。

これら一連の名称に対し、独りタチモチだけ特異である。他が総て転倒やそれに伴う尻餅を期待する名前であるのに対し、これは立つ事をアピールする。恐らく、一歳未満は立つ事がタブーであり、一歳過ぎれば立たなければならぬ、換言すれば坐る事をタブーとした意図を反映する命名であろう。即ち、ブツイモチとタチモチは表裏一体の関係であり、初誕生日を境としてその前から歩くか、後から歩くかで同一の餅の名称が変わるので

あつた。

いずれにしろ、一歳未満の子供は立ち歩く事がタブーであり、不幸にして歩いた場合は一升餅を背負わせて倒し、形式的に歩かなかつた事にするという意図が、これら餅の名称から明確に窺われた。これら餅の名称の分布状況を地図2に纏めておいた。さらに、これに否定伝承の分布図を重ねると、一つの面白い現象に気づく。即ち、名称の分布範囲が浦和市を中心とした県の東南部に集中するのに対し、否定伝承もまた殆ど同じ範囲に分布する。一歳未満の歩行は「よくない」からブツツ工餅を背負わせて転倒させるといふ儀礼上のシエーマは、この段階で見事に一致した。名称と伝承は矛盾する事なく重なるのである。

これが本来の姿とすれば、否定伝承を伴わないが餅を背負わせている他の事例は、かつてはブツツイ餅・ブツツ工餅と呼ばれていた如く、転倒の意図を含んでいたと断定して間違ひあるまい。餅を背負うという儀礼の意味はここにあった。単なる「力持ち」を言うのであれば、この類の餅の名称が数多く有るはずであるが、埼玉県下では管見の及ぶ範囲では一例も見出し得なかつた。儀礼の実体を反映しない名称など付けられなかつたのである。

六、意図的転倒

名称・伝承だけでなく、実際に意図的に引きずり倒す地区が一〇例ほどある。1の浦和市三室の山崎では、ブツツイ餅といって誕生日は一升餅を背負わせ、「それでもぶつつかないとむつと増やしてしよわせ、ぶつつかせ」た。2の浦和市大久保領家では、誕生前に歩いた子にはブツツイ餅と称し、「丸餅を背負わせ、歩けなくなるまで餅の数を増やし」た。6の戸田市では、ブツツ工餅と称する一升餅を風呂敷に包み、「子供におわせて、ひっくり返るまで歩かせた(略)いつまでも歩いていけると、わざとひっくり返し」ていた。8の和光市では、丸餅を風呂敷に包んで背負わせ、「転ばないようなことがあると、更に量を増やしたり、後ろから押したりして、必ず転ばせるもの」であつた。9の和光市上新倉や10の下新倉では一升餅を背負わせるが、「稀に餅を背負わせても転ばないようなこ

とがあると、更に二升餅を背負わせ、必ず転ばせるもの」であり、「後から押したりして、必ず転ばせ」た。¹³の狭山市では「故意に突いて転ばしたりする風習」があった。¹⁹の北葛飾郡庄和町倉常では、「一升餅をしょわせて歩かせ、わざとつつついて転ばせ」た。²³の秩父郡大滝村では、餅を背負って歩かせ、「しょってヤイヤヤム」と唱えながら子供を突き倒す。

原則的に、一歳未満で歩く子は、転倒目的で、餅を背負われ、それでも倒れないと、以上九例の如く無理やり押し倒されるのであった。この時に背負う餅が、ブツエモチ・ブツイモチ・ブツワリモチなどと呼ばれる必然性はここにある。埼玉県下の場合、満一歳の誕生日以前の立ち歩きを奨励する名称は3のタチモチが例外的に存するのみであり、他はすべて初誕生以前に歩いた子供の転倒を望む事例であった。一歳未満で歩く子と歩かない子供の間には、決定的な位相の違いがあり、歩く子供は世間的枠組みの中では不都合な存在と見做され、せつかく健康で元気に歩き、さらに一升餅の負荷にもめげずけなげに歩くにもかかわらず、無慈悲にも引きずり倒されるのであった。これは、8のオニツコに象徴される如く、人間の範疇に入れられないためであり、人間の範疇に呼び戻すためには、意図的転倒によって歩かなかった事にするより他に方法が無かったのである。地図2に示した如く、意図的転倒も主に県の東南部に集中しており、ブツイ餅や一歳未満の歩行否定伝承とほぼ重なり合う。かつてはこの三者は密接に関連し合い、初誕生儀礼の根幹をなす部分であった。現在は、単に歩いても歩かなくても餅を背負って祝う行事のように見做され、また栄養状況の変革によって一歳未満の歩行が一般的となり善とされているが、より詳細に検討すれば以上の様な事柄が透けて見えてくるのである。

〔註〕

浦和市総務部市史編纂室編『浦和市史民俗編』、四五八頁、一九八〇年三月刊。

文化庁編『日本民俗地図（出産・育児）』一〇〇頁、一九七七年五月刊。

川越市総務部市史編纂室編『川越市史民俗編』八三丁八四頁、一九六八年三月刊。

- に同じ、一〇三頁
- 越谷市史編纂室編『越谷市民俗資料』九七、一〇二頁、一九七〇年三月刊。
- 戸田市編『戸田市史民俗編』九三頁、一九八三年三月刊。
- 戸田市史編纂室編『美女木下笹目の民俗』三三頁、一九八五年三月刊。
- 和光市編『和光市史民俗編』四七九、四八〇頁、一九八三年三月刊。
- 和光市史編纂室『上新倉の民俗』八一頁、一九八〇年三月刊。
- 和光市史編纂室『下新倉の民俗』一〇五頁、一九八一年三月刊。
- に同じ、一〇九頁。
- に同じ、一〇八頁。
- 狭山市編『狭山市史民俗編』二八七頁、一九八五年三月刊。
- に同じ、一〇一頁。
- に同じ。
- 東松山市教育委員会事務局市史編纂課編『東松山市史資料編第五巻民俗編』二二七頁、一九八三年七月刊。
- に同じ、一一五頁。
- 岩槻市役所市史編纂室編『岩槻市史民俗史料編』五八二頁、一九八四年三月刊。
- に同じ、一一九頁。
- に同じ、一一八頁。
- に同じ、一〇五頁。
- に同じ、一〇六頁。
- 三峰神社誌編纂室編『三峰神社誌民俗篇第一分輯』三三三頁、一九七二年八月刊。
- に同じ、一一一頁。
- に同じ、一一〇頁。
- に同じ。
- に同じ、一一二頁。

- ②⑧ 同じ、一一七頁。
 ②⑨ 同じ、一一六頁。
 ③⑩ ②⑧に同じ。
 ③① 小池信一稿「埼玉県の祝事」、『関東の祝事』所収、二四三頁、一九七八年一月刊。
 ③② 恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』四六〇頁、一九三八年頃報告、一九七五年三月刊。